なり、寺を距ること巳午方四町許り、新城の東南に對せる岩壁に窟あり、馬頭觀音の像を彫刻し、岩觀音と稱ず、三月三日參詣多し、亦小堂を營なみ、藥師を安置す、傍に梵字等あり、初じめ當寺の住僧是を安置せしゆゑ、岩屋を以て山號とするにあらずや、

○岩窟　本文に見ゆ、

長用山眞光寺（地頭館より巳方七町餘、辰）　麓村にあり、飯野曹洞宗長善寺の末にして、本尊十一面觀音、開山素用和尚（馬關田大圓寺二世、遷化年紀詳なら）ず、安永元年壬辰十二月廿八日、火あり、故に來由傳はらず、初め新城の西にありしに、享保中、霧島山燃たりし時、砂石の災を被り、今の地に移すといへり、

佛寺合記　正元山法心寺　紙屋村にあり、本府眞言宗大乘院の末にして、本尊地藏菩薩、開山僧詳ならず、中興の僧を盛賢（延享二年乙丑八月十五日、遷化、）といふ、△流水山福万寺　紙屋村にあり、高岡曹洞宗法華嶽寺の末にして、本尊藥師如來、開山東岳和尚、（本寺七世、）

舊蹟

新城（地頭館より未の方、十二町許、）　麓村にあり、きしなきが城とも號す、清泉あり、天正の頃、伊東方より福永丹波守をして守らしむ、天正五年丁丑十二月七日、松齡公、軍を發し當城を攻給ふ、城陷り福永歸降す、貫明公も亦後軍を率ゐて至り、軍を移して戸崎城を拔き給ふ、

○本城　新城の東傍にあり、小城なり、

城蹟合記　戸崎の城　麓村にあり、事は前條に見はす、△戸ケ崎城　紙屋村にあり、天正の頃、紙屋主税之介此城を守れりと云、△榛野城　榛野村にあり、是亦紙屋主税之介領せ

りとゞ、　△薩摩ヶ城　麓村にあり、　邦君御陣營の蹟といひ傳ふ、△金重ヶ城　麓村にあり、事蹟詳ならず、　△今城紙屋村にあり、里傳云、天正六年、大友義鎮、我境を侵すの時、貫明公、此所に於て靈夢を感じ給ふとなり、按ずるに是時公御夢中に、うつ敵は龍田の川のもみぢかな、と云へる句を得給ひ、八万の大敵を一戰にして勝を得給ふとあり、これをいふなるべし、　△火立城　三ヶ所あり、一は麓村、一は三ヶ山村、一は紙屋村にあり、昔し伊東方より號火を起し所なり、

物産

藥品類　柴胡　△白朮　△紫根　△桔梗　△和人參

走獸類　野猪　△鹿

鱗介類　香魚　△鰻

叢談

吊躍　當郷毎年八月十七日躍あり、其來由を問ふに、慶長七年壬寅八月十七日、伊集院源次郎忠眞を當邑麓村に誅ず、爾後毎年其日其村に火災あり、土民以謂らく、忠眞怨靈の致すところならんと、故に土民躍りを興行し、其災なからんことを禱る、これを吊ひ躍と號す、是よりして火災遂に鎮りぬといへり、

三國名勝圖會卷之五十四終

三國志魏略曹真傳第五十四